

「世界秩序の崩壊」

ジョージ・ソロス(著)、越智道雄(訳)

ランダムハウス講談社 2006年10月11日刊

本書は今年で76歳になった投資家ジョージ・ソロスが世界の現状に対して警鐘をならすべく書き上げたものである。ソロスといえば、巨額の利益を得てきたヘッジ・ファンド投資家として記憶されているかもしれないが、今やビル・ゲイツと並ぶ世界最大の慈善活動家でもある。

本書の主題は彼が運営するオープン・ソサエティ財団を通じたソロスの慈善活動の内容を紹介したものである。このオープン・ソサエティという概念は次のように要約できる。すなわち、我々の知識は不十分なもので、また社会は多くの不確実性に満ちている、その結果として我々は多くの誤謬を犯す、しかし、それは健全なことであって、その誤りを正して軌道修正すればいいし、それが認められているような社会を指している。

ソロスはこのようなオープン・ソサエティを理想として旧社会主義国や貧困にあえぐアフリカ諸国に多額の資金移転を行っている。本書を読むと、ソロスが政府関係者あるいは民間団体と交渉し、『貧困の終焉』（早川書房）で描かれている経済学者ジェフリー・サックスが具体的な処方箋を書くというようなプロセスが多く、多くの国で見られることに気づく。世界の諸問題に対して、世界基準の価値観を提示し、世界規模で解決にあたるという活動は、少し前なら国際連合、IMF、世界銀行などの国際機関、あるいは覇権国家アメリカが行うということが常識であったが、現在は、経済的成功者が私財を投じて、政治家や官僚を通すことなく、しかもアメリカや受入国政府の意にそぐわないような活動であっても支援できるようになってきたことを雄弁に物語っている。

実際、ソロスは「9・11」以来、アメリカ社会が不愉快な現実から目をそらす「自分さえよければ社会」になってしまったこと、その結果突入したテロとの戦争というアプローチを強く批判し、自ら代替策を模索している。

ソロスの慈善活動を見ると、日本で論じられている格差社会の議論で欠けている富者の社会的貢献とはいかにあるべきかという問題に目を開かせてくれる。